

新 雲仙プロジェクト通信 12号

平成27年5月9日

今回のプロジェクト通信は、平成27年5月9日（土）に、奥雲仙田代原高原にて行なわれた長崎大学環境科学科の1年生の野外研修に参加した際の報告です。

◆長崎大学とのお付き合いの始まりは

奥雲仙田代原高原のミヤマキリシマ保全活動に、共助研として参加したのが平成25年の11月からです。その切っ掛けは、雲仙市千々和に在住の共助研メンバーの松本さん（チームギア代表）より、中田代表を紹介されたことで、その後、共助研メンバで、どのようなお手伝いができるか手探り状態で、草刈りのお手伝いや、助成事業申請書作りのお手伝い等を行ってきました。

昨年、NPO 奥雲仙の自然を守る会の中田代表から、若い人の力も借りたいという申し出に対して、かつてJCCAの研修会に講師としてきていただいた長崎大学の深見准教授にご相談したところ、「いやあ、実は、私どもも雲仙市内で野外研修ができる場所を探していたところでした」とのことで、一気に、学生さんたちを交えた活動に展開したことが発端で、平成26年の5月と7月、および、11月に実施され、多くの学生さんたちが、田代原を訪れてもらうことができました。また、昨年は4年生の靄田さんが、卒論の研究テーマに「環境保全とNPOの活動に関する研究」を取り上げていただき、田代原で活動するNPOとそれをサポートする共助研の活動を分析した立派な論文を書き上げ、卒業されました。

その後、ご担当が深見先生から、中川先生に引き継がれ、今年度の27年度も昨年同様に5月と11月の年2回の学生さん向けの野外研修フィールドとして田代原高原を取り上げていただくこととなりました。

◆5月9日の野外研修活動について

昨日までは晴天続きだった天候が、この日限って崩れてしまい、奥雲仙田代原高原に到着した時は、雨と霧で最悪？の状態になっていました。この日の共助研からの参加者は、赤星副会長、松尾新リーダー、木寺さん、山下さん、濱田さん、それと、私（矢ヶ部）の6名です。

一方、長崎大学からは、中川先生はじめ、杉村先生（森林学）、小林先生（法律）、関先生（環境倫理）、それと、太田先生（環境保全）の5人の先生方、それと23名の環境科学科の1年生の学生さんたちです。様々な分野の先生方に興味を持ってもらうことができ、とても心強く感じました。



若い学生さんたちの熱気であふれる奥雲仙の研修室

◆NPO 中田代表の挨拶と、環境省岸田自然保護官からの講義

NPO 奥雲仙の自然を守る会の中田代表から、先生方と学生さんたちに、これまでの活動の経緯を、厚く語っていただいた後、NPO の木田さんより、ミヤマキリシマの現状報告、そして、環境省の岸田自然保護官から、国立公園の概況と島原半島全体の魅力の説明がされました。特に、島原半島の草原環境に生育していたミヤマキリシマは昭和初期の 95%がすでに失われていること、島原半島が海で囲まれているため、雲仙岳の景観も見る角度で大きく変わることが魅力の一つであること等の興味深い話がありました。特に、自然公園の役割としての「自然保全」と「利用」のバランスをとらなければならないこと、雲仙国立公園における田代原高原の特異性などの興味深い話をわかりやすく説明いただきました。質問時間には、小林先生から、「もっと、レンジャーの数を増やすことはできないのか」などの質問がなされ、岸田さんより地元の取り組みを支援する環境省としてのスタンスの解説がなされました。

思いのこもった中田代表の挨拶と説明



岸田自然保護官の国立公園の概要説明

◆おいしいお弁当タイム

午前中の座学が終わり、おいしいお弁当タイムに。恒例の地元食材を用いたお弁当と、これまた格別においしいおやつの子ズゼリーは、皆さんに大好評でした。食事をとりながら、環境省の岸田さんや瀬戸口さんは、学生さんたちと談笑していました。また、この昼休みの時間を使って、共助研の紹介を松尾新リーダーから行いました。ふと外を見ると、研修の始まりに降っていた雨も上がり、薄日が差してきているのです。集まった全員の気が、おてんとうさまに通じたかのように天気が回復しつつあります。



松尾新リーダーによる共助研の紹介



田舎饅頭の説明をされる入口さん

◆田代原高原（上）と田代原高原（下）「遊々の森」の見学に

雨も上がり、咲き乱れるミヤマキリシマを鑑賞するために、田代原高原へ。学生さんは、放牧中の牛をめずらしそうに眺めたり、ピオトープ池にうごめくオタマジャクシの群れに悲鳴？をあげたりと、なかなかのにぎやかさです。学生さんたちは、木田さんの現地における説明を熱心に聴きっていました。

そのあと、遊々の森の田代原（下）を視察し、残された草地環境の価値や、魅力のある自然観察・遊び場として理解されたかと思います。トレイルセンターをさらっと見学し、再び、研修室へ。



◆総括とアンケートの記載

短い時間でしたが、田代原高原の問題点を知り、その現状を視察することができました。最後の締めで、NPOの顧問をされている渡辺さんから、若い人たちへの激励・エールに満ちた話をいただきました。

アンケートを記載し、一路、長崎へ。お疲れ様でした。アンケートの結果の抜粋を添付しましたのでご参考ください。

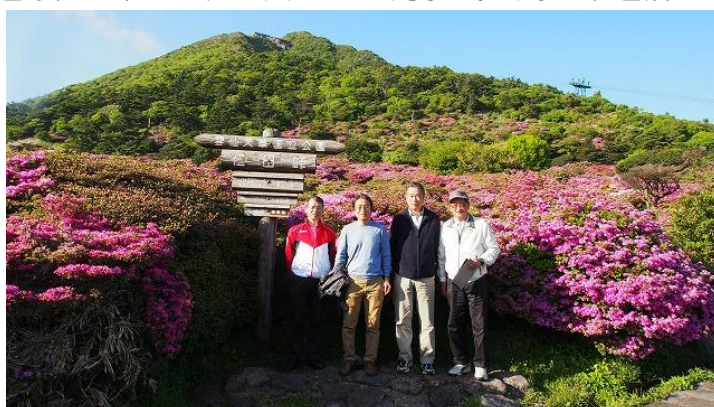


◆NPO と共助研の今年度の活動の話し合いがなされました

NPO 奥雲仙の自然を守る会と共助研メンバーに、環境省の岸田さん、瀬戸口さんが加わり、今年度の活動に関する討議が行われました。活動の主旨や目的を明確に伝えることが必要であること、地元の積極的な関与が必要であること、そして、そのような動きを背景に雲仙市を巻き込んでいくことが必要等が話し合われました。また、今回、長崎大学の様々な専門の先生方に来ていただいたことで、より、総合的な視点で、ここ田代原高原の課題を解決していけないかということについても話ができました。

◆仁田峠のミヤマキリシマの見学

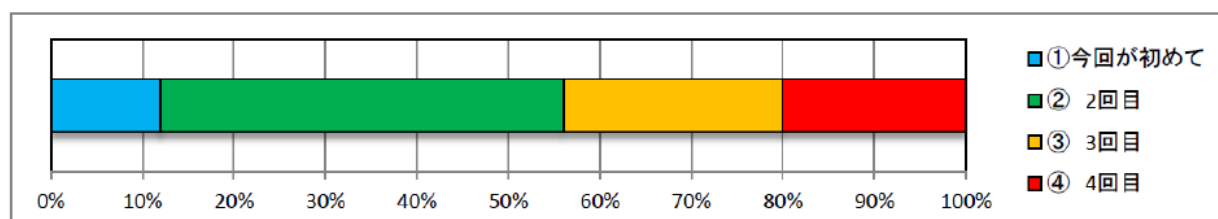
田代原の帰りに、共助研メンバー5人で、有名な仁田峠のミヤマキリシマを見学に。さすが、名所といわれるだけあり、ミヤマキリシマが一面咲き乱れる風景には、圧倒されました。確かに、規模や迫力からいえば、仁田峠に比べ田代原のミヤマキリシマは、分が悪いのですが、草原に咲くミヤマキリシマとしての独特な景観は、田代原ならではのものでもないと再認識しました。



(参考) アンケート結果から抜粋

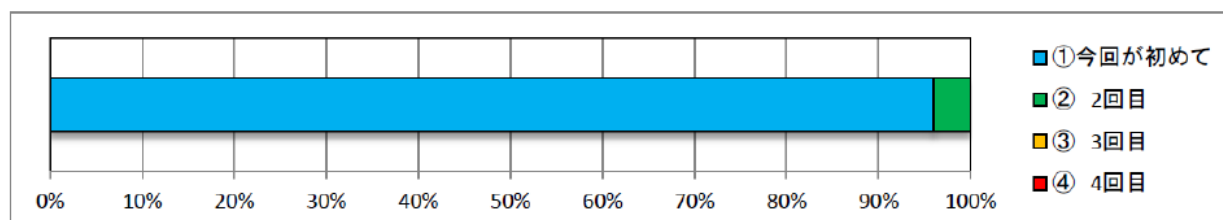
1. 雲仙・島原に、これまで来られたことはありましたか。

選択肢	①今回が初めて	② 2回目	③ 3回目	④ 4回目		計
回答数	3	11	6	5		25
比率	12%	44%	24%	20%		100%



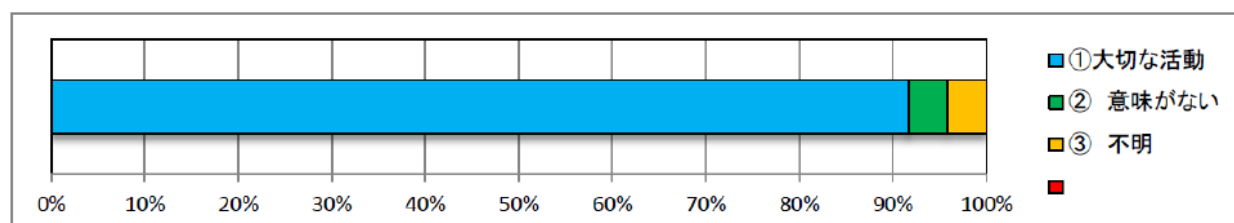
2. 田代原高原に、これまで来られたことはありましたか。

選択肢	①今回が初めて	② 2回目	③ 3回目	④ 4回目		計
回答数	24	1	0	0		25
比率	96%	4%	0%	0%		100%



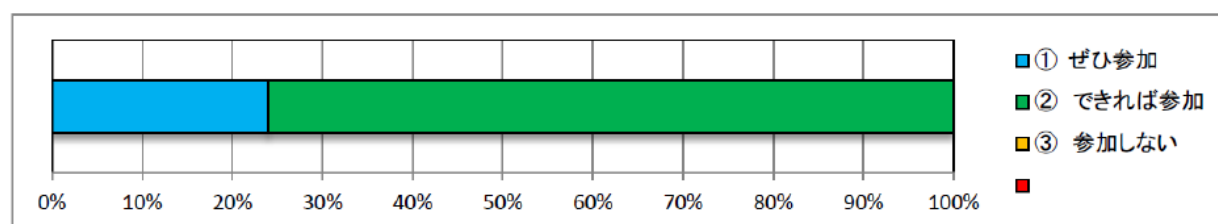
5. 現在行っているミヤマキリシマの保全活動の目的や意義について

選択肢	①大切な活動	② 意味がない	③ 不明		計
回答数	22	1	1		24
比率	92%	4%	4%		100%

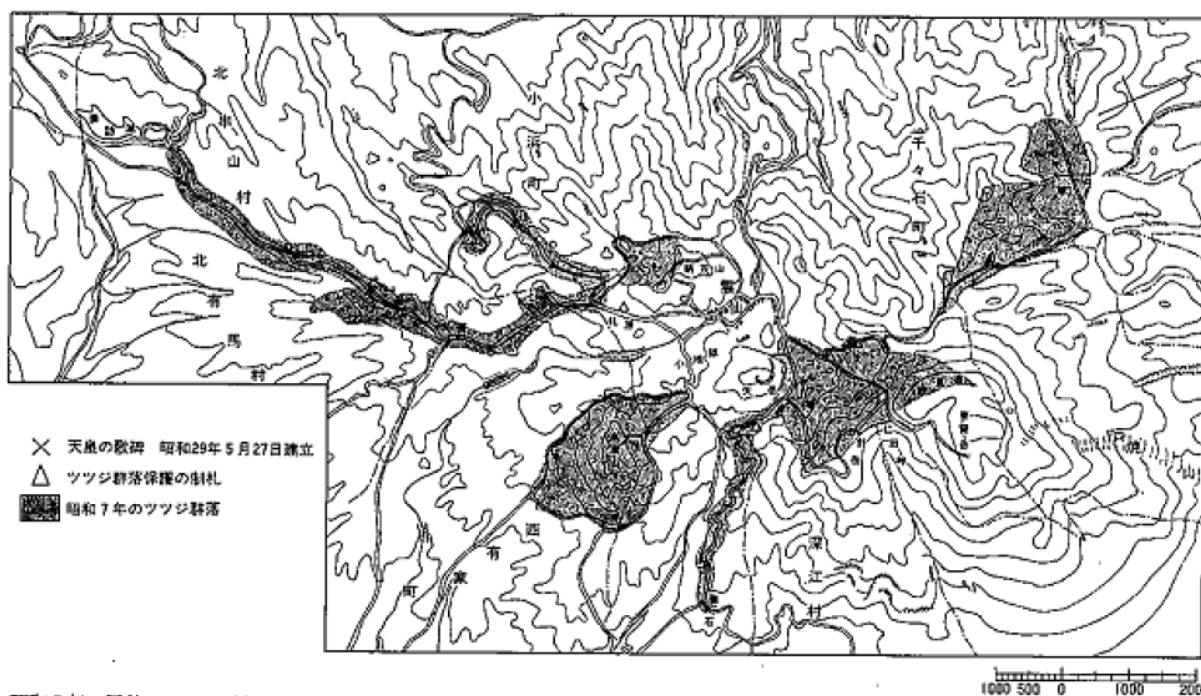


6. 今後、ミヤマキリシマ保全活動に協力をお願いしたら参加されますか

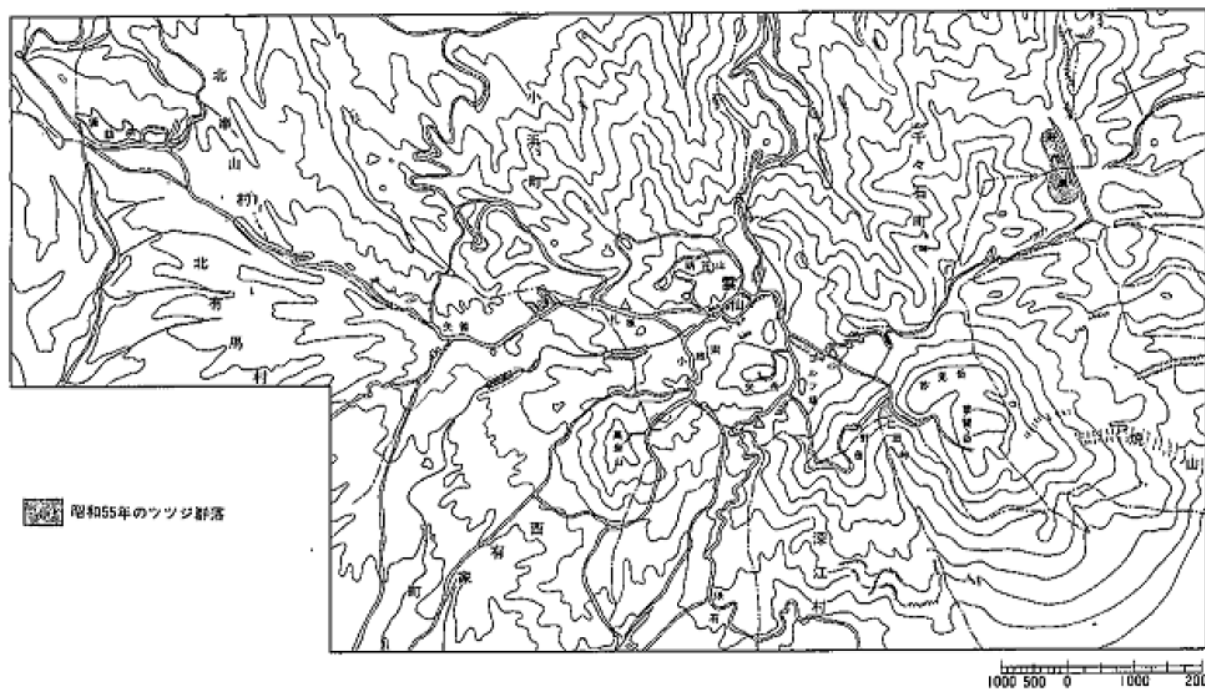
選択肢	①ぜひ参加	② できれば参加	③ 参加しない		計
回答数	6	19	0		25
比率	24%	76%	0%		100%



(参考：岸田自然保護官提供資料) 昭和7年には、800ha あったといわれるミヤマキリシマ・ツツジ群落も、昭和55年には、すでに33haに激減。現在は、さらに、その生育範囲を狭めている。(出典：日本の自然公園(自然保護と風景保護)：田中正大)より抜粋)



昭和7年 雲仙のツツジ群落——当時のミヤマキリシマとヤマツツジの群落。道路に沿った部分を除いて約800ヘクタールの面積を占めていた。昭和9年国立公園として指定されるのは、この群落が大きな理由になっていたという。なお、禁札(79頁)と天皇歌碑は新たにつけ加えたもの。昭和29年建立の天皇の歌碑は雑木におおわれて接近不能になっている。【雲仙岳大観】長崎県「国際雲仙公園風景図」より。



昭和55年 雲仙のツツジ群落——ツツジ群落は4ヶ所約33ヘクタールのこっているにすぎなくなった。田代原のものはヤマツツジの群落で放牧によって維持されている。他の3ヶ所は放牧をやめていらい、人の手入れによって辛うじて生存をつづけている。かつて800ヘクタールをこえた雲仙のツツジ群落は放牧の廃止とともに大部分消えてしまった。わずかここ50年足らずの変化である。

本日の一枚+1枚 (田代原に咲き誇るミヤマキリシマ)



【第12号 新雲仙プロジェクト通信作成担当：矢ヶ部】